「お手紙」の読み

上越教育大学教職大学院
松　本　　修

「お手紙」は、現在三社の教科書で小学校２年生の読書教材として採用されている。アーノルド・ローベルのシリーズ作品のうちの一つで、教科書では、三木卓の訳による日本語版をもとにしたテクストが使われており、挿絵も原作のものが用いられている。フロッグ（日本語訳ではかえるくん）とトード（日本語訳ではがまくん）を二人の主人公としたほのぼのとしたシリーズは、たとえばアマゾンのホームページでは次のように解説をほどこされている。*1

このかわいらしいペアは、なくしたボタンを探したり、春にあいさつをしたり、郵便を待ったり、５つのすてきな物語をぴょんぴょん飛び回る。２人が互いを心から思いやる気持ちはすばらしく、トードとフロッグは両生類の姿をしたすばらしいお手本だ。子どもたちはフロッグと一緒にトードが愚かしい努力をするのを見て、くすくす笑うだろう。そして長い冬眠からついに目覚めるトードに、きっと拍手を送ることだろう。５番目の物語は、いつかペンパルを持とうという人や、本当に信頼のおける友だちがいるのがどんなことか知っている人なら、誰でも心があたたまることだろう。

あたたかくゆかいな友情の物語を演出するアーノルド・ローベルのブルーとブラウンのイラストは、すべての読者の心をひきつけ、気持ちよく楽しませてくれる。ローベルの名作「Frog and Toad」シリーズの一作である本書は、カルデコット賞を受賞し、全米図書賞児童文学部門でも最終候補に残った実力をもつ。ぜひ子どもの本棚に加えたい一冊だ。

話の梗概は、次のようなものである。

がまくんが玄関に座っているところにかえるくんがやってきて、「きみかなしそうだね。」と言う。がまくんは、手紙をまっているが、手紙をもらったことがないので、ふしあわせな気もちになるんだと答える。二人はかなしい気分でげんかんにこしを下ろしている。

やがてかえるくんは「しなくちゃいけないことがある」と家へ帰り、がまくんへの手紙を書く。そして家から飛び出し、知り合いのかたつむりくんに手紙をがまくんの家の郵便受けに入れるように頼む。

それからかえるくんはがまくんの家に戻り、がまくんに手紙を待つように誘い、手紙

---

*1　アーノルド・ローベル　三木 卓訳（1972）　『ふたりはともだち』文化出版局　の解説　http://www.amazon.co.jp/

を待つ。しかし、かたつむりはなかなかやってこない。手紙なんて来やしないというがまくんに、かえるくんは、自分ががまくんに手紙を出したことを話す。そして、その手紙の文面も教える。がまくんとかえるくんは、玄関に出て、しあわせな気持ちで手紙を待つ。四日たってかたつむりが着き、がまくんへ手紙を渡す。

この物語を読むと、大きな疑問が残る。それは、「かえるくんはなぜがまくんに手紙の内容を教えてしまったか。そして、手紙の内容を知った二人が、なぜ幸せな気持ちで手紙を待っているのか。」ということである。前半は、がまくんが手紙なんて来ないというので、待ちきれずに教えたと一応答えることが出来る。しかし後半の問いは難しい問いである。

この作品やこれを教材とした授業論はほとんどないが、ネット上ではいくつかの教材論らしきものを見ることができる。そのうちの一つが、この点についての発問を提示した次の論である。*1

「二人とも、とてもしあわせな気持ちでそこにすわっていました。」とあります。かえるくんは、お手紙を持つことがしあわせなのですか。

がまくんは、お手紙を持つことがしあわせなのですか。いっしょにいることがしあわせなのですか。

かえるくんは、悲しそうでないがまくんと、いっしょにいることがしあわせなのである。一方、がまくんは，前述の『ああ。』の解釈によって、異なってくる。

つまり『ああ。』が、『きみの親友、かえる。』を受けていると考えれば、しあわせな気持ちにさせているのは、手紙を待つことと、いっしょにいることの両方となる。

しかし、『ああ。』を『いいお手紙だ。』のつながりと考えれば、手紙を待つこととなる。

がまくんは、かえるくんと一緒にかえるくんからの手紙を待っている。すでにふたりは「親友」として結ばれていることをかえるくんの手紙の言葉によって示されており、がまくんがかえるくんの手紙を待つことは、かえるくんと一緒であることによってより幸せなものとなる。分けられるものではない。ほとんど意味不明の論であるが、冒頭の玄関の場面と末尾の玄関の場面の比較が重要であり、「手紙の内容を知った二人が、なぜ幸せな気持ちで手紙を待っているのか。」ということを考えることがこの物語の読みのポイントであることは共有されている。

二つの場面は次のようになっている。*2

「だれもぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。

---

*1　江埼一平　http://www.fsinet.or.jp/~m-zen/otegami02.htm

*2　本文は、学校図書『みんなと学ぶ　小学校こくご　二年上』による。

毎日ぼくのゆうびんうけは空っぽさ。
手紙をまっている時がかなしいのはそのためなのさ。」
二人ともかなしい気分でげんかんの前にこしを下ろしていました。

「ああ、」
がまくんがいいました。
「とてもいい手紙だ。」
それから二人はげんかんに出て手紙が来るのをまっていました。
二人ともとてもしあわせな気もちでそこにすわっていました。
長いことまっていました。

「かなしい気分で」が「とてもしあわせな気もちで」に、「こしを下ろしていました」が「すわっていました」に変化している。「こしを下ろして」いるよりも、「すわってい」る方が、安定性を増している。この変化は重要である。*1

また、挿絵を見ると、次のような違いがある。冒頭の二人は、悲しそうな表情であり、それぞれの膝のところで自分の両手を組んでおり、がまくんは左足を右足に重ねて、指は力なく伸びている。一方、末尾の二人は、互いに肩を組み、楽しそうな表情であり、足の指は、ピンと上を向いて躍動的である。

この変化は、もちろん、手紙の内容を知った二人が、なお幸せな気持ちで手紙を待っているということによってもたらされている。それはなぜなのだろうか。

結局のところ、二人は四日も手紙を待つことになる。それくんは、かたつむりに手紙を頼んだことに起因している。かえるくんは手紙をなぜかたつむりに託したのだろうか？

小学校２年生がどうこの問題を考えるのかを知るために、次のようなインタビューを行った。

「お手紙」の読み調査（親子インタビュー）１

２００８年１０月２７日　２年生男子

母親が、教科書の「おてがみ」を何度も読み聞かせていた。

調査ではまず、子ども一人での音読、母親と子どもでの「かえるくん」と「がまくん」に分かれての音読を行う。

この子どもは、一人で石を並べて石に教科書を読み聞かせるというような「遊び」もしていた。なお、母親は小学校の教員である。

インタビューを起こしたプロトコルを見ると、次のようなやりとりになっている。（下線は松本）

---

*1　この二カ所の表現の比較が重要な意味を持つことについては、2008 年 8 月 30 日の第２回 RISE セミナーにおける筑波大学附属小学校　白石範孝教諭による授業に啓発された。

「お手紙」についての親子インタビュー1　　08. 10. 27

M:母　T：たすく　Y:ゆうや（友達）H:はやと（友達）S:しゅうへい（友達）

M1　どうしてかえるくんは、かたつむりくんにたのんだんだと思う？

T2　そりゃあ、当たり前だよ。お手紙っていうのは、他の人がとどけるからお手紙なんだよ。自分で持っていって、「ハイお手紙」だと、「ああ、ハイハイ」みたいな感じで、がまくんもあんまり喜ばないでしょ。

M3　どうして？

T4　他の人が届けるからいいんでしょ。来るかなドキドキ。やった。だれかな。みたいな。だからわざわざかたつむりくんに頼んだと思うけど。

M5　じゃあ、例えばだよ。Yくんがお手紙が来なくて悲しんでるとして、Tが家に帰ってお手紙書くとするでしょ。そしたら、だれかに届けてって頼む？

T6　頼む。ぼくがさ、自分で届けてもたいしたうれしさじゃないよ。

M7　誰に頼むの？

T8　Hくんかな。いや、やっぱりSくんにする。

M9　どうしてSくんなの？

T10　だって、Hくんは足が速いからさあ、ぼくより先に着いちゃうでしょ。５分待ってから来て、っていってもさあ、気が早いから待ってられないかもしれないもん。Sくんだったら，Yくんが悲しんでるからって言えば「えっYくんが」って言ってちゃんと待ってからちゃんと来てくれるはず。

M11　どうして５分待ってから届けてほしいの？

T12　お手紙きっと来るから待ってみようよ、とかなんだりかんだり。とか言ってさ。いっしょに待ってあげたいでしょ。お手紙待つって楽しい、みたいなさ。やっぱり１時間にしようかな。

M13　Sくんに１時間待ってから届けてもらうってこと？どうして？

T14　Sくん待ってくれるかな。たぶん。やさしいから。ぼくにとっては長い方がいい。

M15　どうして？

T16　長くないと、がまくんみたいに、待たないうちに着くと悪い。お手紙くるよ。わくわくって感じで待った方がいいから。長くないといじけたままだと困る。

M17　いじけたままじゃだめ？

T18　うん。お手紙来るかもよ。わくわくってのがいい。

M19　じゃあ、どうしてかえるくんは、がまくんにお手紙出したことやお手紙に書いたことを教えちゃったのかな。「しんあいなるがまがえるくん」とか書いたこと教えたでしょ。

T20　納得させるため。がまくんのいじけた気持ちを変えさせるために教えた。そうしないといっしょに待ってくれないから。

M21　いっしょに待つことが大事なの？

T22　しあわせな気持ちってことが大事なんだよ。お手紙待つってしあわせだと分からせるんだよ。ふたりで待ってるとこにかたつむりがもってきて、ふたりで喜ぶ。

M23　じゃあ，待ってるシーンの絵を見てみようか。はじめとおわりの絵を比べてみようね。どこが違う？

T24　がまくんの目が笑ってる。微妙に。はじめは、悲しい感じ。
M25　あとは？
T26　口があいてる。しゃべってる？「もうすぐ来るよ」「楽しみだな」みたいな。
M27　あとは？
T28　う～～～～～～～ん。手が違う？
M29　どうちがう？
T30　おたがい組み合ってる。最初は自分で組んでる。
M31　あとは。
T32　わからん。

手紙を待つ時間が必要であること、がまくんを納得させて一緒に待つために中身を教えたことが説明されている。待つ時間は長い方が良く、幸せな時間を共有することが大切であるとしている。がまくんが誰も手紙をくれいないといういじけた気持ちから解放され、中身を既に知っている手紙を長い時間かけて待つことに必然性があるということが充分に示されている。配達人は、かたつむりくんでなければならなかったのだ。

そしてこのインタビューにはもう一つ重要なことが語られている。手紙であることの必然性である。なぜがまくんは手紙にこだわったのか、そしてかえるくんは手紙を書いて第三者に託したのかという点である。インタビューイの言うように、自分で届けたのでは手紙ではない、というところに要点があるものと考えられる。このインタビューではその内実は十分にはわからなかったので、再調査を試みた。方法は最初のものと一緒である。

「お手紙」の読み調査（親子インタビュー）２

２００８年１２月２９日　２年生男子

母親と子どもでの「かえるくん」と「がまくん」に分かれての音読を行ったあと、インタビューを行っている。

インタビューを起こしたプロトコルを見ると、次のようなやりとりになっている。（下線は松本）

「お手紙」についての親子インタビュー２　　08. 12. 29

M:母　T：たすく

M1　じゃあ、TにTがこのお手紙のお話のことをどう思っているか聞きたいんだけどいいですか。
T2　はい。
M3　かえるくんはさあ、がまくんにお手紙を書いたでしょ。で、それを自分で渡さなくてかたつむりくんに頼んだでしょ。どうして頼んだんだと思う？
T4 どうしてかっというと、が、が、がまくんをすぐ信用するかなと思って、かたつむりくんに頼んで、ねえやってみようよ、とか言って、お手紙が来るのを誘ってた。
M5 う～ん。じゃあ、どうして自分で渡さないわけ。
T6　渡さないのは何でかって言うと、<u>自分で渡しても相手は喜ばないから。</u>じゃあさあ、

言うよ、「じゃあ、これお手紙、自分で書いたお手紙、はい。」なんかさあ、ドキドキしないでしょ。

M7　うん、確かにね。書いた人からもらったら、ってことでしょ。

T8　でも、「これ、かえるくんからのだよ。」ってもらったら、「これ、何があるんだろう〜。」

M9　「何かいてあるんだろ〜」とか。

T10　あと、とってもいいなあ、とか、こんなこと書いてあったんだ、とか、びっくりしたり、気持ちが伝わる、っていう感じ。

M11　他の人からもらうと、気持ちが伝わるってことなんだ。本人からもらうより伝わるわけ。

T12　まあ、伝わるかな。

M13　どうしてかなあ。

T14　こうさあ、自分でさあ、「あるよ。」って感じで渡してさあ、でも、人から「お手紙だったよ。」って渡してさあ、こうやって、渡してもらうと、ドキドキしてうれしくなっちゃう。「何だろう、何だろう。」って感じがして、おもしろくなっちゃう。あと、こういうのが書いてあるんだ、どういう感じで書いてあるんだろう、って考える。

M15　なるほどねえ。じゃあさあ、どうしてかたつむりにたのんだんだろうね。

T16　足が遅いとはかん、あと、目の前にいたし、あと、そんなに足が遅いとは気づかなかった。

M17　じゃあ、足が遅い人に頼んじゃって失敗したってこと？

T18　失敗してはいない、ドキドキして「来やしないよ。」とか言ってたけど、

M19　誰が誰が

T20　がまくんが。でも、こうだよ、ってことを教えてあげて、がまくんもドキドキして喜んだでしょ。だから、失敗ではない。

M21　う〜ん、もっと足が速い人に頼めばよかったんじゃないの？

T22　でも、足の速い人にいくと、呼びかけたりする暇がなくなる。例えば、しようよっていう前に、はいこれ〜みたいな感じで、はいお手紙、って感じですぐ渡されちゃう。かえるくんからすぐ渡されちゃう。

M23　すぐ渡した方がいいんじゃないんだ。

T24　遅くくると、「何があるんだろう。」っていう感じがますます伝わってくる。遅くくると、一緒に待ってあげて、相手によかったね、とか言って、うれしく励ますっていうか、うれしくする、うれしくさせる、（お手紙もらうってことを）うれしいって思うように、よかってね、って言葉でいうと、がまくんとか、お手紙もらった人が喜ぶ。「ぼくがあげたんだよ。」って言ったら、「へっ君が。なんて書いたの？」って言ったら「親愛なるがまがえるくんへ」っていい言葉だったから、感動しちゃって「これは、君が渡したお手紙があるんだね。一通でもいいから、渡してくれたお手紙があるんだね。これでぼくはもう、安心だよ。」って感じで。

M25　なるほど。

T26　かたつむりくんも、本当にぼくが役に立てたのかな、って感じ。

M27　なるほど。ぼくも

T28　思ってた、みたいな感じ。

M29　じゃあ、二人だけでやるのと、かたつむりくんがいるのとではどう違うの？

T30　励ます人が一人だとさあ、「ああ、よかったなあ」だけどさあ、

M31　うんうん。

T32　無事届いたね、ってその人がいうとするでしょう。かえるくんがいうとするでしょ。そうしたら、「よかったね、がまがえるくん、無事お手紙が到着して」みたいに（かたつむりくんが）言うと、かえるくんとか、その人が、

M33　その人ってかたつむり？

T34　う、うん、役に立てたのかな、とか、がまがえるくんは、届いてよかったな、ってことを併せて、友情みたいな。いい、友達になる。

M35　お手紙もらって、いい友達になるんだ。そうか。あと何か言い残したことあるか？

T36　まず、がまがえるくんが信用してくれたことがいいな、って信用したことがえらいな、って思う。

M37　手紙なんか来ない、って言ってたのに信用したんだね。

T38　「ぼくが書いたんだよ。」「うそだよ。」とか言わないで「きみが書いたの？」って逆に驚く方でしょ。だから、それもえらいな、と思う。

M39　それ、どこだ。

（本文を読む）

かたつむりくんによって手紙が遅れて届けられることの意味がふたたび語られており、この読み手の「読み」は変化していないことが見て取れる。その上で、手紙とは、他者によって届けられることで意味があること、そして、おそらく文字で書かれていることによって、より気持ちが伝わるということ、第三者の媒介によって、友情が確かめられるというようなことが述べられている。

かえるくんはがまくんに、「手紙になんて書いたの？」と聞かれ、こう答えている。

「ぼくはこう書いたんだ。『しんあいなるがまがえるくん。
ぼくはきみがぼくのしんゆうであることをうれしくおもっています。きみのしんゆう、かえる。』」

内容が明かされた手紙を待つことの意味は、まさに待つ時間を共有するということにあった。そのためにかたつむりくんが配達人として必要とされたわけだ。このことは教材研究でも基本的には共有されていることであろう。たとえば、高木まさきは次のように述べている。[*1]

---

*1　高木まさき編著（2009）『情報リテラシー　言葉に立ち止まる国語の授業』明治図書 pp.28-29

もし手紙を「かたつむりくん」ではなく、たとえば「バッタくん」などに頼んですぐに手紙が着いてしまっていたらどうか。あるいは「かえるくん」が手紙の到着を「がまくん」と一緒に待たないで、すぐに帰ってしまっていたらどうか。それでも「ぼくは、きみの親友だ」というメッセージは届くが、果たして「がまくん」はそれを十分に実感できただろうか。そう考えると、「がまくん」を喜ばせているのは、手紙のメッセージもさることながら、「かえるくん」が一緒に居てくれること、あるいは四日間も一緒に手紙を待ち続けてくれたといういこと、それが大きな意味をもっていたことが分かるのではないか。つまり、「かえるくん」は「がまくん」とともに長い時間を過ごすことで、言葉だけでは伝わらない、本当に大切な何かを伝えることができた。そしてそこにこそ「親友」であることの真の証があったと言えるのではないか。

しかし、そもそもなぜそれは「手紙」でなければならなかったのか。それは、面と向かって「僕は君の親友だ」と口で言うような形では、言葉の本質的な意味で相手に届けられる言葉にはなり得ないからだ。言葉は、第三者によって媒介され、証されることで、真の意味を獲得する。かえるくんがいくら「こう書いた」と言って手紙の内容を明かしても、がまくんは「いい手紙だ」とはわかって幸せになっても、実際に「手紙」が配達されなければ、その幸せを確かめることができない。インタビューイは、「がまくんとかえるくんとかたつむりくん」の三者によって友情が確認されるというように、物語の文脈に即して説明しているが、手紙が手紙でなければならないことの理由を直観的に理解しているものと思われる。

こうしてみると、この物語の読みにおける学習では、冒頭と末尾の場面の表現と挿絵の比較を契機に、「かえるくんはなぜがまくんに手紙の内容を教えてしまったか。そして、手紙の内容を知った二人が、なぜ幸せな気持ちで手紙を待っているのか。」という問いをめぐって、さらに、「なぜかたつむりくんによって手紙が届けられなければならないのか。」「そしてそれはなぜ手紙でなければならないのか。」を問わねばならないということになるだろう。

小学校２年生段階では、解釈の言語化や、自分の読みに対するメタ認知には限界がある。しかし、一方、直観的であっても、本質的な読みは行われている。このような問いをめぐって、何らかの形で話し合いを展開することは可能である。そのような学習を集団の中でどのようにデザインするか、それが課題として提示されているものと思われる。

（まつもと　おさむ）